世界深層 in-depth

研究員は言った。「神が人類を創造した」

in-depth 「掘り下げた」を意味する英語で、報道や研究などに用いられる

進化否定 米の博物館

ケンタッキー

人類など地球上の生物は、長い時間をかけて自然に進化してきた――。日本を含む多くの国ではそれが常識だが、米国では必ずしもそうではないようだ。旧約聖書の創世記の通り、神が6000年前に6日間で万物を創り上げたと信じる「キリスト教保守派」の人たちが中南部を中心に少なくないからだ。ケンタッキー州では、天地創造をテーマに進化論を否定する博物館が人気スポットとなっている。(ワシントン 中島達雄、写真も)

■数十分待ち

「アメーバは最初からアメーバ、魚は最初から魚、人類は最初から人類です。神が人類を創造したのです」。ケンタッキー州ピーターズバーグの「天地創造博物館」で、地質史学専攻のテリー・モーテンソン同館研究員が、生物の進化の「森」と題された図を掲げてそう話すと、講堂を埋め尽くした約300人の見学者たちがうなずく。反論の声はひとつも出なかった。

この博物館は、12万人の会員を持つキリスト教団体「アンサーズ・イン・ジェネシス」(創世記の中の答え)が、ピーターズバークの敷地20ha(約33億5700万円)をかけて建設。2007年5月に開館した。今年2月現在で230万人が訪問。週末は家族連れを中心に行列ができ、数十分間待たなければ中に入れないほどだ。

■恐竜・人類が共存?

展示室のロビーでは、ジャングルで動く恐竜の模型に子供たちが見入っている。「貝、普通の自然史博物館のようだが、よく見ると違う。恐竜の檻で人類のような人形が座っている。科学の世界では、恐竜は約6500万年前に絶滅し、人類はずっと後の数十万年前に誕生したとされ、恐竜と人類の共存があり得ない。

反対側には、様々な色や形に進化した鳥「フィンチ」の写真が並ぶ。進化論の提唱者で英国の博物学者チャールズ・ダーウィンも、南米エクアドルのガラパゴス諸島で観察した有名な鳥だ。説明には、「神がフィンチを含む鳥類を創造した際、地球上のあちこちで繁殖できる能力を授けた」とある。同じ鳥が別の環境下で独自の進化を遂げたという科学研究の成果は無視されている。

見学コースを進むと、「ノアの方舟」の模型やアダムとイブの人形などが現れ、テーマパークのようだ。1日目、神が天地を創造。…5日目、海と空の生物誕生。6日目、陸の生物誕生。6000年前、神が6日間ですべてを創造したとする説明が並ぶ。旧約聖書に基づく博物館の基本概念がここに集約されている。インディアナ州から子供連れで見学に来た娘院事務の男性(39)は「とても楽しめた。進化論は知っているが、聖書が間違っているという証拠もないのでは」と話した。

■「宗教施設だ」

「博物館と呼ぶべきではない」

進化教育を守る活動を続けている非営利団体「全米科学教育センター」(カリフォルニア州)のジョシュ・ロゼナウ計画政策部長はこう断言した。

「科学っぽさで見学客の関心を引いておきながら、科学を誤解させている。博物館ではなく宗教施設だ」

米エタバレー大のデビッド・スコット教授(情報学)も、「科学や科学者に疑問を抱くよう誘導している」と指摘する。見学者のコメントを分析したところ、「素晴らしい」「また来たい」など展示を素直に受け入れているコメントが目立った。「天地創造を信じる人が、自分が正しいと確認するために来館するケースが多いと考えられる」という。

■ノアの方舟も

こうした科学者らの批判はあるが、天地創造をテーマにした博物館は増加傾向にある。

東大大学院博士課程で博物館学を専攻する小森真樹さんの調査によると、こうした博物館は2013年現在、米国に27か所、カナダや英国、オランダなどに9か所ある。アンサーズ・イン・ジェネシスは、ピーターズバークの天地創造博物館から車で40分ほどの場所に、全長155mに及ぶ実物大のノアの方舟を展示する別の博物館を建設中。「天地創造ブーム」はしばらく続きそうだ。

教育現場でも広がり

旧約聖書に基づく天地創造の考え方は、信心深い米国人の間でそれなりに受け入れられているのが実情だ。

米調査機関ピュー・リサーチ・センターが昨年、米国の科学者団体「米国科学振興協会(AAAS)」と合同で、一般市民とAAAS会員の科学者を対象に意識調査を行った。進化については、市民の31%が「人類や他の生物は最初から現在の姿で存在していた」と進化を否定、24%は進化を認めつつ「現在の姿の人類などを創造するため、特別な存在が進化を導いた」と回答した。これに対し、AAAS会員の科学者は「自然に進化」が90%だった。

AAASのアラン・レシュナー前最高経営責任者(CEO)は、「進化は聖書の記述と食い違うため、受け入れられない人もいる。科学は時に宗教的な信念に負けてしまうが、なるべく食い止めなければ」と話す。

米国民のこうした考え方は、公立学校の教育にも影響を及ぼしてきた。

古くは1925年、テネシー州で進化教育を禁じる法律が制定され、高校の理科教師が有罪になった例がある。これに対し、連邦最高裁は97年、合衆国憲法修正第1条の政教分離に違反するとして、天地創造を学校で教えることを禁じた。

だが、2008年にルイジアナ州で「科学教育法」が成立。「学問の自由」の名目で、公立学校で天地創造を教えることが可能となった。同様の法律制定の動きは中南部を中心に広がりつつある。

米政府は慎重だ。オバマ政権のロベルト・ロドリゲス大統領補佐官(教育政策担当)は13年、「進化論には多数の裏付けがあり、生物学の最も基礎的な理論」としながら、「学校教育の基準作りは州政府と地方自治体の仕事」と、天地創造教育の排除には踏み込まなかった。

❶恐竜と人類が共存する展示を眺める見学客たち ❷ノアの方舟の模型の展示。 実物大、方舟も建設中で、2016年に開館の予定となっている(いずれも4月、米ケンタッキー州ピーターズバークの天地創造博物館で)

生物の進化についての意識調査結果

	米国の一般市民	AAAS会員の米科学者
長い時間をかけて自然に進化した	35%	90%
長い時間をかけて特別な存在が進化を導いた	24%	8%
最初から現在の姿で存在していた	31%	2%

※2014年10月のピュー・リサーチ・センターと米国科学振興協会(AAAS)の合同調査より

天地創造信仰 週末は行列

魂の沃野 219

北方謙三

わが四囲にあるもの(四―2)

檜を漕いできた二人は、いつまでも同じ姿勢で動かない。

はじめは寝そべって眺めていたが、やはり気になって、芳蔵は上体を起こした。

静かである。遠く、多屋の並んだところからの喧噪は伝わってくるが、御坊は無人なのではないか、と思うほどだった。

僧がひとり、七曲りを駆け降りていった。いつも、芳蔵に冷たい視線しかむけない僧だった。時々は、それが嘲りのように見えることもあった。青年を押して、水に叩き込んでやろうか、という思いに駆られた。思うだけだ。ほんとうにはやれないのが、自分だった。

船着場の僧が、七曲りの方を気にしている。しばらくすると、数人が降りてくる気配があった。姿が見えた。順句という、大柄な僧がいる。女もいる。

「上人様」

思わず、芳蔵は呟くように声を出した。二人の僧に守られるように降りてきたのは、蓮如上人に間違いはなかった。

夕刻なのに、これから巡教に出かけるのか。まず思ったのは、それだった。しかし、帯同している僧の数は、順句も入れて四名である。しかも、女の姿まである。

五人が、小舟に乗った。すぐに舫い切られ、舟は出ていった。船着場では、僧がひとり見送っているだけである。

まるで逃げるようではないか、と芳蔵は思った。立ち上がり、木の幹を抱いて、舟が見えなくなるまで、じっとしていた。

なにがあったのか、考えたのはそれからである。なにか、危険があった。そうとしか見えなかった。

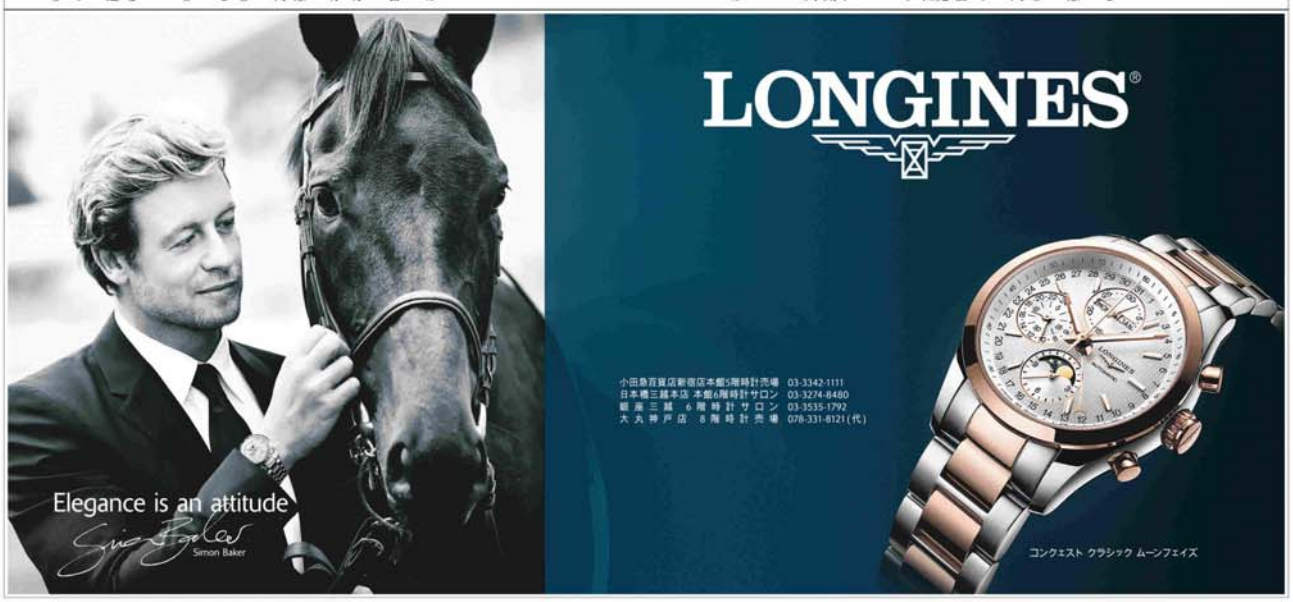
芳蔵は、幹や枝に纏わりながら、七曲りに出て、御坊の方へ駆けた。

もう、静けさはなかった。

僧が走り回っている。芳蔵を見て、為のある者がいない。芳蔵は書院に駆けこみ、蓮崇の姿を捜した。部屋には、いなかった。書院と庫裡の間の狭い庭に、青年が見えた。青年だけにしか見えないほど、蓮崇は座りこみ、頭を垂れていた。

芳蔵は声を出せず、立ち尽くしていた。

画 西のぼる



©読売新聞社 無断転載、複製を禁止します。